

東光原

熊本大学附属図書館報

Kumamoto University Library Bulletin, No.17, June. 1997

● 図書館の来し方行く末

熊本大学附属図書館架蔵 特殊文庫の紹介(一)

● 永青文庫蔵細川家文書のこと

● 電子図書館事始め

—EES：電子ジャーナルの提供—



慶長国絵図（部分）

永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託（第13回特殊資料展パンフレットより）

図書館の来し方行く末

中村直美

図書館とは、文字通り図書の館（やかた）のことであるが、語源を求めると、図書とは、元来、「河図洛書（かどらくしよ）」の略で、五経の一つ『易経』の「河出図、洛出書、聖人則之」（黄河の竜（馬）が八掛の図を、洛水のカメが甲の書を伝え、聖人がこれを範として道徳上の原則などを作った）との記述に由来するものらしい。

中国では、古く周の時代（紀元前11～3世紀）には、蔵書の制が始まったと言われる。日本では、唐の制度を輸入して発布された大宝律令（701年）によって設けられた「図書寮」が、図書館ということばと重なるが、経籍・仏像の管理の他、紙筆墨の製造供給、写経・書写などを行う役所であったようで、今の図書館に近いものももっと後にならないと見られない。もっとも「館」（明治以降に見られる大きな建築の意味が強い）よりも、「文庫」「文倉」「亭」「楼」などのことばが用いられたようである。

西洋では、実に紀元前21世紀にバビロニアに瓦文書の図書館があったとも言われる。図書館遺跡として残されたものとしては、有名なアッシュルバニパル（アッシリアの王、紀元前626没）のそれが古い。これも有名なアレクサンドリアの図書館（エジプト、紀元前3世紀頃）はパピルスに書かれた象形文字の巻物を約50万巻所蔵していたというから驚く。

西洋思想の源泉である古代ギリシャにソクラテス、プラトン、アリストテレス等など（紀元前5～4世紀）、百花繚乱、かくも多様な思想が開いた理由はいろいろあるのだろう。しかし、図書（書籍）を売り買いするマーケットがあって、そこを想定しながら思想家が本を著し、それを知性ある奴隷が複製（複写）したという事情がその理由であるという見解（今世紀の最も偉大な思想家の一人カール・ポパーが、先年亡くなる少し前に京都で行った講演で披露した見解—当時私は高齢である彼の近い将来の死を予感してその講演を聞きに出かけた。）はおもしろい。それから、少し時代を下ってヘレニズムの時代に小アジア（西岸北部）のペルガモン（アッタロス王朝）の城壁内には、アクロポリスの下、蔵書を誇ったと言われる大図書館が遺跡の中に確認できるそうだから、我々が今日これらの大

思想家達の思想にふれることができるのもペルガモンその他の図書館のお陰でもあろう。

ともあれ、ポパーの見解も取り込んで言えば、文字（記号）の発明、書籍市場の発達、印刷術の発達、さらに目下進行中の「情報革命」をもこれに加えるべきであろうが、数次の文明史上画期的な出来事に後押しされながら図書館も発展して来たことは間違いなからう。

現代の図書館とは、辞書によれば、記録された知的文化財（図書、絵画、写真、録音その他の資料）を収集・保管し人々の利用に供する機関である。収集・保管の対象でなく利用の内容（目的）から見れば、研究・教育（学習）・余暇利用（レクリエーション）が図書館の機能ということになる。もっとも大学図書館の場合は、他の公共の図書館とは異なり、サービス提供の主たる対象は大学の教職員・学生であり、利用内容（目的）も余暇利用というのはやや入りにくい。大学図書館基準（昭和57年）も「大学の研究・教育に不可欠な図書資料を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習等のための利用に対し、これを効果的に提供すること」と大学図書館の機能を限定的に規定している。しかし、今、大学図書館も大きな転換の時期に入ってきていると言えるのではなからうか。以下、大学図書館の行く末を思いつつ、私の勝手な感想をいくつか述べることをお許し戴きたい。

(1)大学の研究教育機能をサポートする役割は、今後とも大学図書館の重要な機能であり続けるであろう。その意味で、教育図書館としての機能のより一層の充実を図りつつ、これまで弱体であった研究図書館としての機能の強化を図ろうとする現在の本学附属図書館の方針は妥当なものであろう。これに加えて、大学の研究、教育とならぶ第3の機能と言われる大学開放（ユニヴァーシティ・エクステンション、つまり生涯教育への参入）の機能が今後ともますます要求されるようになることを考えると、図書館もその面でのサービスへの取り組みを真摯に考えて行かなければならない。

(2)大学の「大衆化」が指摘されるようになって久しいが、大学が少数の知的エリートのための特殊な空間

ではなくって来ている。教育の面では、カリキュラムの改革や、入試制度の柔軟化、社会人の受け入れなどがこれに対応する意味をも持つものとしてすでに試みられている。大学図書館も研究教育のサポートのみでなく（あるいはその延長線上で）上に述べたキャンパス・ライフにおけるレクリエーション的な面でのサポートを考えねばならなくなっているのかも知れない。憩い・アメニティとか談笑のための空間といった視点も必要とされるのではないか。

(3)「情報化」ということばもわれわれの社会に完全に定着したと言ってもよかろう。その情報化の波が図書館に押し寄せることにより、機関としての図書館は消滅すると予測する者もいる。これからの図書館が加速度的に電子化された情報と色々な形でますます関わらざるを得なくなることは明らかで（平8学術審議会も「大学図書館における電子図書館機能の充実・強化」を提唱している。）、昔ながらの「図」と「書」の館に止まり得ないことは間違いない。しかしながら、すべての情報が電子化され得るかどうかは疑問であるし、仮に殆どのものがそうなるとしても、財政的裏付け、人的（それを担い得るスタッフの）裏付けの問題（それらを欠いたままでの拙速的な情報化の推進は混乱を招くであろう）などを考えれば、そうなるためにはかなりの時間を要すると思われる。それゆえに次の問題(4)が依然として緊急かつ重要な課題となろう。

(4)マイクロフィルムの主唱者F. ライダーは、1930年代に、エール大学図書館の100年後を、蔵書2億冊、書架延長6,000マイル、カード目録室34,000m²と予測したそうだが、蔵書数の増加従って蔵書のためのスペースの増加のすごさは学部で図書を預かる者としても実感できる。法学部でもここ20年間で1.5倍にはなっており、試算すると毎年の増加スペースは0.5スパン（2年に一つの研究室）に相当する。当然ながら、研究室の不足が生じ、他の形の施設の有効利用が妨げられることになる。これまで特に文系の研究者は、その研究が図書資料への依存度が大きいためもあって、なるべく身近な所に（つまり学部）に図書資料を置きたいと考えて来た。その考えは今日も基本的には変わってはいないと思う。しかし背に腹は変えられない。これからは、附属図書館は学部でかかえきれなくなった図書の管理を当然ながら引き受けねばならない。そこしか図書が帰って行く所はないのである。皮肉なことながら、幸いにしてそれは研究図書館としての機能を高めることにもなる。共同利用性の高いもの、管理に注意を要するものなどの他、学部での利用頻度の低いものの引

き取りなども考えねばなるまい。この点では、「集中型と分散型との適度な共存」（平3北地区再開発懇談会報告書）を図ること、専門性の高い資料センターを設けること（同報告書及び昭62「図書館の現況と将来構想」）は、後者の実現の可否はともかく理念としては妥当なものであろう。

（なかむら なおみ 法学部教授 基礎法学）

本学教官寄贈著書紹介

上利 政彦 教授（文・欧米言語学）

Essays on English Literature
and Language in Honour of
Shun'ichi Noguchi
Edited by Masahiko Kanno,
Masahiko Agari,
and Gregory K. Jember
EIHOSHA 1997

岩岡 中正 教授（法・政治学）

五高・熊大キリスト者の青春
—花陵会100年史—
花陵会100年史編集委員会編集
熊本大学Y M C A 花陵会 1996.12

櫻井 陽子 助教授（教・国文学）

平家物語絵巻
林原美術館編著 櫻井陽子解説
クレオ 1994.5

荒井 賢三 助教授（理・物理学）

力学の基礎
橋本正章 荒井賢三著
裳華房 1996.9

熊本大学附属図書館架蔵 特殊文庫の紹介(一)

永青文庫蔵細川家古文書のこと

松本 寿三郎

本学附属図書館に架蔵する特殊資料のうち最も著名なものが表題の細川家文書であろう。この文書は財団法人永青文庫の所蔵するもので、永青文庫の寄託によって本学に架蔵し閲覧に供しているのである。この古文書類は旧熊本藩主細川家および熊本藩関係のものであり、本来は熊本城内に設けられた諸役所に伝来したものであった。江戸時代は俗にいう文書時代であり先例を重んじた時代であったから、各役所には事務の指針となる例書・先例を参照するために書類をとどめておくことあるごとに参照していた。役所にとって欠くことのできないものであった。明治維新によって藩体制は崩壊し、新政府は検地帳や徴税関係の書類を継承したが、藩政にかかわる書類の多くは廃棄された。

熊本藩の古文書類は、旧藩主細川家の北岡邸にうつされ、「お文庫」「川端お倉」「御神庫」「御宝庫」「七間御蔵」の五つの倉庫に厳重に架蔵されており、『北岡文庫』とよばれていた。文書に『北岡文庫』の押印があるのはそのためである。明治以後熊本市は市街の大部分を焼失した西南戦争・太平洋戦争に見舞われたのを始め、幾多の火災、水害にさらされたが、山懐に抱かれた北岡の地でこれら古文書は保存され、昭和25年『永青文庫』として世人の目にふれることとなった。財団法人永青文庫は、北岡文庫に所蔵する古文書を始め、細川家に伝来する美術品・古文書・典籍類を広く一般に公開することを目的として成立されたものである。所蔵品のうち国宝・重要文化財に指定されている美術工芸品の多くは東京都文京区目白台の永青文庫で保存され展示されている。

本学附属図書館に寄託されているのは、国文関係の書跡や典籍および旧熊本藩関係の文書・古記録類である。この文庫は上妻博之氏によって『北岡文庫蔵書目録』として整理されたが、約6,000点(冊数にして20,000冊を超える)に及ぶものである。古文書・記録は倉の名称と書架の配列番号によって分類されており、この分類は本学附属図書館でも踏襲されている。永青文庫蔵細川家古文書のうち文学関係の貴重書については荒木尚教授が前回までの『東光原』に四回にわたっ

て述べておられるので、大方の内容を想像できると思うので、歴史史料について紹介しよう。

この歴大な古記録類は熊本藩藩政のすべてを網羅するものであるかという点、必ずしもそうではない。細川忠利は父忠興のあとをついで小倉城主になり、熊本に移封されたのであるが、忠興時代の藩政史料は本人とともに八代城にあり、第四子立孝の家(宇土細川家)に伝来された。したがって熊本細川家には忠利以後の小倉・肥後の藩政史料が残ったことになる。

宝暦期以後の藩政は機密間(総務)・役人選挙(人事)・勘定方(会計)・御郡方(農政)・寺社方・類族方(キリシタン取締り)・刑法方など13の部局があったが、機密間日記・奉行書日帳・日帳・日記など奉行所関係、いろは別先祖帳・藩臣閥録草稿・青龍寺以来の面々子孫・古奉公附など人事関係、口書から誅伐帳にいたる裁判記録、異国船御手当一件・尊攘録・長洲御征伐記など幕末関係、内政については初期藩政を分類した部分御旧記や触状控、細川家の自家記録などが濃厚に残されており、現在「覚帳」として同一の分類をしているものの中には、郡方のものが圧倒的に多いが、当用方、勘定方など諸役所のものも含まれている。「覚帳」は村々で解決できなかった事件について奉行所に指示を仰いだもので、地方役人の功績評価の書類である「町在」とともに、郡村支配の実態を如実に伝えるものとして高く評価され、近年熊本県内の市町村史編纂がさかんになるにつれて利用されている。

このほかお抱え絵師によって描かれた動植物の図鑑や幕府の命をうけて作成した国絵図、領内の川絵図などは他では見ることのできない逸品である。

本図書館では昭和59年以来毎年特殊資料展を開いているが、毎回永青文庫の新しい資料を展示している。題目を挙げてみる

1. 永青文庫資料にみる細川氏の入国
2. 細川重賢没後二百年記念
3. 細川幽斎関係文学書
5. 永青文庫史料による熊本城図展
6. 永青文庫史料による近世熊本の町の生活

7. 細川家のローマ字印
8. 太平記の世界
9. 信長と幽斎
10. 細川重賢の文事
11. 肥後の博物学
12. 『永青文庫』の文学書
13. 絵図でみる細川氏の領国支配

永青文庫資料展はこれできものではなく、いまさらながら永青文庫所蔵品の多様性に驚くのである。貴重な藩政史料であるがあまりにも厩大であり、現在まで印刷されたものは次に示すようにごく一部に過ぎない。

- 東大史料編纂所編
『大日本近世史料—細川家史料1～15』
- 出水神社発行『出水叢書1～12』
- 熊本大学史料刊行会編
『熊本大学史料叢書 藩主裁可文書一』
- 森田誠一編『細川家旧記・古文書分類目録 正編』
- 細川藩政史研究会編
『細川家旧記・古文書目録 続編』
- 熊本県教育委員会編『細川家文書（中世篇）』

- 熊本県教育委員会編『細川家近世文書目録』
上記のほか『熊本市史』『玉名市史』『鹿央町史』『菊鹿町史』史料編に収録している。

永青文庫の利用法（学外の研究者の場合）

永青文庫蔵細川家文書は寄託の古文書であるから利用するには、まず東京目白台の永青文庫に閲覧書目を申し出、写真撮影については別個に許可を得る必要がある（書式自由）。許可が得られればその許可書を添えて、閲覧資料名のほか閲覧希望日時等を明記した利用願いを事前に附属図書館長宛に提出して閲覧の許可を得ること。

また附属図書館の古文書閲覧は月曜から金曜までに限られているのであらかじめ承知しておく必要がある。前もって閲覧の日程と閲覧書目録を提出しておけば、手続きに時間をかけずに閲覧できて好都合である。

（第4木曜日は休館）

永青文庫の所在地

〒112 東京都文京区目白台1-1-1

財団法人 永青文庫（TEL 03-3941-0850）

（まつもと すみお 文学部教授 国史学）

〈資料紹介〉

最近購入の資料から

熊本藩家老米田家文書 10点

（平成8年度大型コレクション）

・米家舊記抄	96冊
・有吉先祖以来覚書	3冊
・妙解院様御代御軍役記	2冊
・大阪御陣之節御人数被指出帳	1冊
・御納戸ニ納居候舊記抄	4冊
・米家舊記抄	13冊
・米田家傳録	6冊
・御納戸要録	1冊
・米田監物宛肥後藩士書翰及覚書類	380通
・肥後藩士海防論意見書類	18綴

蒙古襲来絵詞 全2巻

帝国議會衆議院委員會議録（継続）

「昭和編」90巻～122巻

帝国議會貴族院委員會議速記録（継続）

「昭和編」64巻～86巻

帝国議會貴族院委員會議録（継続）

第1回～第3回

英国公文書館所蔵資料 マイクロフィルム版

（両大戦間英国大蔵省：経済不況および経済金融）

Part. 1.2

朝日新聞復刻版 明治編、大正編

大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録

研究者・研究課題総覧（1996年版）

※上記資料は中央館に配架していますのでご利用ください。

電子図書館事始め

－ EES : 電子ジャーナルの提供 －

電子図書館、まず雑誌から

最近の図書館で共通しているキーワードは「電子図書館」です。何をもち「電子図書館」というのか決定打はないのですが、大学図書館においては、最も学術的資料といえる雑誌を対象に、ページイメージを画像データとして蓄積し、ネットワークを介して提供する電子ジャーナルが話題になっています。

学術雑誌の電子化には、システムの問題以上に「著作権」という制度的な問題解決が重要と言われていています。紙への印刷複製でなくデータベースに複製蓄積すること、また製本頒布ではなくネットワーク上で送信するといった新たな行為について、しかも雑誌に関わる多数の権利者から許可が必要になります。

著作権と電子ジャーナル

その著作権をクリアするという観点から見ると、大学図書館における電子ジャーナルの提供には次の3つの形態が考えられます。

- ① 著作権を保有する出版者自身が発行する電子ジャーナルを購入して提供する
- ② 学内紀要等を論文執筆者や発行者から著作権使用の許可を得て電子的に蓄積し提供する
- ③ 学会誌のように個々の大学で著作権処理が困難なものは、全国レベルの学術関係機関で著作権処理を行なって提供される電子ジャーナルを利用する

①は欧米の学会や商業出版社で提供されつつあるもの、②は本学でも科学研究費補助金によって行なっている実験、さらに③の一例が文部省学術情報センターが今年度からサービス開始したNACSIS-ELSと言えます。今回は、①の例として最近注目を浴びているEESをご紹介します、残りは次号以降ご紹介します。

熊本大学におけるEESの試験的導入

EES (Elsevier Electronic Subscription : エルゼビア電子購読契約) は、世界的な学術出版社であるエルゼビア社が発行する雑誌の冊子体を購読契約している機関が、追加料金を支払うことで学内LANを通じてフルテキストデータ、ページイメージの画像データを自

由に利用できるサービスです。この度、ライフサイエンス系の雑誌を中心にして45タイトル(表)をEES購入することにしました。今年度利用状況を分析・評価を行なった上で来年度からの重複雑誌の調整や電子ジャーナル購入化の参考資料とする予定です。

EESを利用するには

冊子体の雑誌が図書館に行けば誰でも自由に閲覧できるのと同様に、EESは附属図書館のホームページ(<http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp>)にアクセスすることで、学内ユーザはどなたでも利用できます。附属図書館ホームページの「情報検索」を選択しさらに「EES」をクリックして下さい。なお、初めてEESを利用する際はシステムが所属や身分等を質問しますが、あくまでも統計採取を目的とするものでプライバシーは保護いたしますので、ご協力ください。

ブラウジングとサーチ

基本的な検索法としては、ブラウジングとサーチがあります。ブラウジングは図書館で新着雑誌をペラペラめくるのに似ていて、雑誌のリストから特定の雑誌を選んで目次を見ながら必要な論文を読むといった使い方です。一方、サーチはデータベースを使った情報検索に似ていて、自分が気になっているキーワードで検索し、ヒットした論文リストから特定の論文のページを見る流れです。何れも最終的にはページ画像をディスプレイに表示し、必要があればプリントアウトすることになります。

PDFの提供と自動検索

EESの画像データはPDF形式でも提供されていますので、パソコンに接続したレーザープリンタでも美しい画像印刷ができます。PDF形式の画像を見るためのソフトAcrobatはフリーでインストール可能です。

また、EESは2週間毎に新しいデータが提供されますが、利用者は検索式を予め登録しておくことで、システムが自動的に検索し、結果を電子メールで送る機能もついていますのでご利用ください。

(電子情報係)

表 ESS対象雑誌45タイトル(1997年)

1. 医・薬・医短関係

- Biochimica et Biophysica Acta - Combines all 10 sections
 - (Bioenergetics)
 - (Biomembrances)
 - (Gene Structure and Expression)
 - (General Subjects)
 - (Lipids and Lipids Metabolism)
 - (Molecular Basis of Disease)
 - (Molecular Cell Research)
 - (Protein Structure and Molecular Enzymology)
 - (Reviews on Biomembrances)
 - (Reviews on Cancer)
- Biochemical Pharmacology
- Biosystems
- Brain Research - Combined all sections
 - (Brain Research)
 - (Brain Research Reviews)
 - (Cognitive Brain Research)
 - (Developmental Brain Research)
 - (Molecular Brain Research)
- Brain Research Bulletin
- Cardiovascular Research
- Computerized Medical Imaging and Graphics
- FEBS Letters
- Gene

- Immunology Today
- International Journal of Nursing Studies
- International Journal of Pharmaceutics
- Journal of Clinical Epidemiology
- Life Sciences
- Mechanisms of Development
- Molecular Immunology
- Neuropharmacology
- Neuroscience
- Neurotoxicology and Teratology
- Resuscitation
- Thrombosis Research

2. その他の分野

- Annals of Pure and Applied Logic
- Automatica
- Cement and Concrete Research
- Cryogenics
- Journal of Constructional Steel Research
- Journal of Mathematical Economics
- Journal of Pragmatics
- Lingua
- Lithos
- Phytochemistry
- Systems and Control Letters

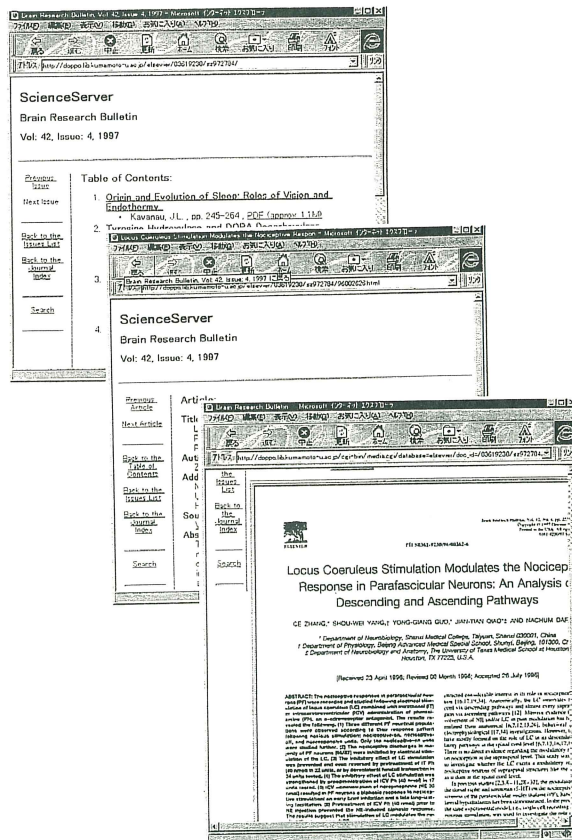
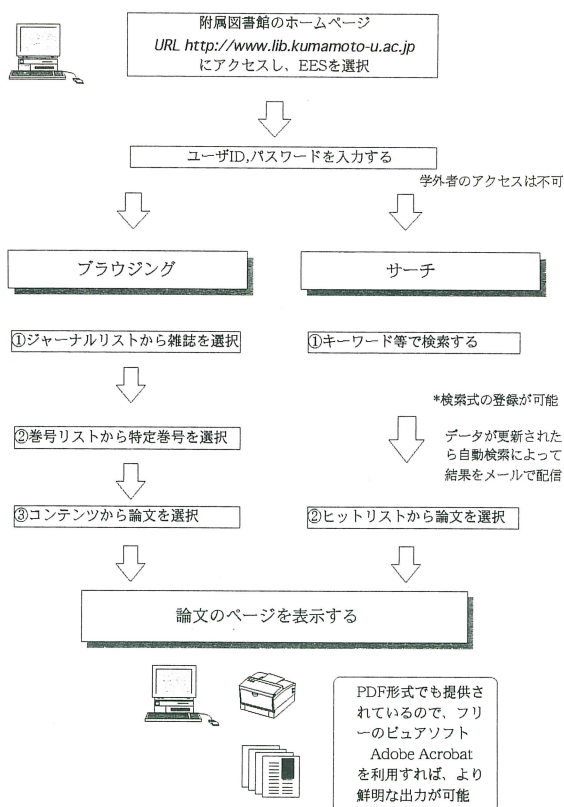
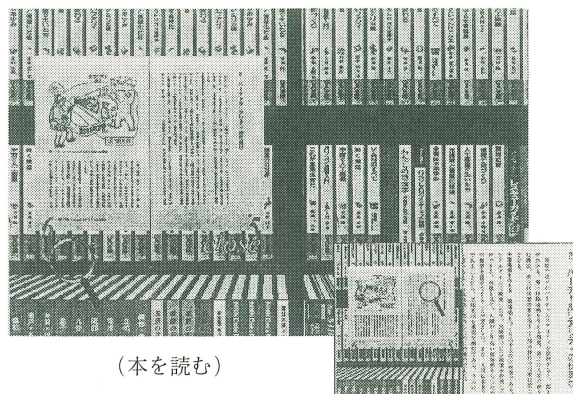


図 ESS利用の流れと画面例

電子図書館セミナーを開催

熊本大学附属図書館では、熊本県大学図書館協議会主催により、去る平成9年3月26日（水）、NEC文教システム事業部電子図書館システム部東谷憲明氏の「電子図書館システム—ユニバーサル図書館の紹介—」と題する講演会を開催しました。電子図書館とは何かに始まり、国内外の代表的な電子図書館プロジェクトの紹介、そして先ごろ新聞等で紹介された同社製電子図書館システム（ユニバーサル図書館）についての説明とデモンストレーションが行われました。

講演ではまず情報へのアプローチを、ある目的をもって探しに行く「検索」とぶらぶら歩き型の「探索」とに分けて考え、「検索」には従来からある各図書館それぞれのOPACを発展させ1つのインターフェースから検索できる統合型の検索システムが、「探索」にはフルテキストのブラウジングができる仮想図書館システムが紹介されました。3Dグラフィックスを使ったこの仮想図書館システムは、案内図等を使って図書館の中を歩き回り、目的の書架に並んだ本の背表紙から読みたい本を手にとって開くと、中身の文章をページをめくりながら読めるという非常に凝ったシステムと



(本を読む)

(拡大表示)

なっています。あたかも実際の図書館を探し回っているような感覚を体感できるのが大きな特徴です。

このような次世代の図書館システムが現実のものとなるには著作権やデータの作成などまだ乗り越えなければならない障壁がいくつか存在していると思われませんが、私たちの目の前に現れるのもそう遠くない将来だと感じられる内容でした。

なお、講演には県内11機関27名の参加があり、最新の電子図書館事情の紹介に関心も高かった模様です。

薬学部分館の“24時間開館”を開始

薬学部分館では、平成9年4月15日（火）開館時間内における利用と併せて、本学教官等の学術研究支援の一環として、「24時間入退館管理システム」を導入し薬学部分館の24時間開館運用を開始しました。

このシステムの特徴としては、先に24時間開館を運用している医学部分館と薬学部分館の両方に共通の“IDカード”を使用し、相互利用できる体制を整えていることにあります。

利用者は、時間外でも閲覧・情報検索・文献複写等が利用でき、ますます研究図書館的機能が整備されました。

当日は、24時間開館セレモニーとして、薬学部分館玄関前において、国枝薬学部長を始め多数の関係者が見守る中で、金原図書館長の祝辞の後、原野薬学部分館長、小川医学部分館長を加えて「薬学部・医学部分館時間外相互利用」運用開始のための堅い握手が交わされました。



また、時間外開館利用者については、医学・薬学部分館時間外利用要項及び各分館利用マニュアルを守って利用されるよう希望します。

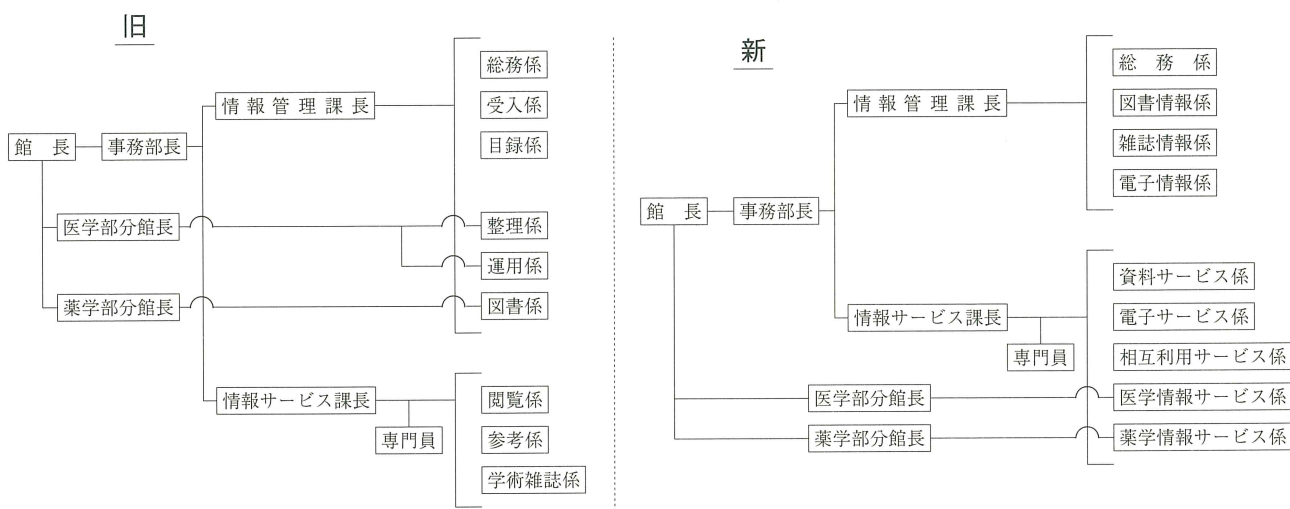
時間外利用申込みについては、薬学部分館窓口（TEL4661）までにご連絡ください。

組織改編と人事異動のお知らせ

平成9年4月1日付けで組織改編と人事異動がありました。これまで各館毎に行っていた管理業務を中央館に集中させ、医学・薬学分館のサービス業務の充実を図ります。また、情報の多様化に対応して電子情報係、電子サービス係を新たに中央館に設置致しました。

今回の組織改編・人事異動を機に、これまで以上にサービスの向上に努める所存ですので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

熊本大学図書館事務組織機構図



人事異動 (平成 9.4.1)

事務部長 福原 勇一郎 (鹿児島大学医学部事務部長)	雑誌情報係長 福島 勲 (情報サービス課学術雑誌係長)	資料サービス係 城 倫子 (情報サービス課閲覧係)	医学情報サービス係 矢野 絹恵 (情報管理課受入係)
総務係長 水城 喜三郎 (九州大学経理課第一契約掛主任)	雑誌情報係 中尾 康朗 (医学部分館整理係)	資料サービス係 市原 慶子 (情報サービス課閲覧係)	医学情報サービス係 市花 恵津子 (医学部分館運用係)
総務係 米田 幸子 (情報管理課目録係)	雑誌情報係 樋口 文子 (情報サービス課学術雑誌係)	電子サービス係長 浦田 博臣 (情報サービス課参考係長)	薬学情報サービス係長 梅尾 勝征 (薬学部分館図書係長)
総務係 園田 雅子 (情報管理課目録係)	電子情報係長 甲斐 重武 (情報管理課目録係長)	相互利用サービス係長 山田 芳郎 (医学部分館運用係長)	薬学情報サービス係 岡崎 絹子 (薬学部分館図書係)
図書情報係長 成田 和則 (情報管理課受入係長)	電子情報係 伊波 ひとみ (情報管理課目録係)	相互利用サービス係 中川 智之 (情報サービス課学術雑誌係)	薬学情報サービス係 矢野 亜希子 (薬学部分館図書係)
図書情報係 川内野 祐子 (情報管理課受入係)	電子情報係 森下 和博 (情報管理課目録係)	相互利用サービス係 吉村 貴子 (情報サービス課参考係)	〈転出〉
図書情報係 原田 繁子 (情報管理課目録係)	電子情報係 井 真祐美 (情報管理課目録係)	医学情報サービス係長 安陪 光恭 (医学部分館整理係長)	金沢大学附属図書館事務部長 青山 弘 (事務部長)
図書情報係 水本 美智子 (情報管理課受入係)	資料サービス係長 北野 典子 (情報サービス課閲覧係長)	医学情報サービス係 佐藤 昌代 (医学部分館運用係)	熊本大学工学部用度係長 島 増男 (情報管理課総務係長)
図書情報係 北野 香代子 (情報管理課受入係)	資料サービス係 野元 剛二 (情報サービス課閲覧係)	医学情報サービス係 梅原 慶子 (医学部分館運用係)	九州大学附属図書館参考調査掛 高木 貞治 (情報サービス課参考係)

図書館委員の交替

平成9.3.31	退任	理学部	松坂理夫
〃	〃	薬学部	宮田健
〃	〃	教養部	樋口康夫
〃	〃	医療短大	石丸靖二
平成9.4.1	就任	理学部	日高徹
〃	〃	薬学部	原野一誠
〃	〃	教育研究センター	篠崎榮
〃	〃	医療短大	平山紀美子

日誌（平成9.1.1～4.30）

- 1.21 古典籍研修会
〃 新CAT説明会（於福岡）
- 1.23 国立大学附属図書館事務部長会議（於金沢）
- 1.28 附属図書館係長会議
- 1.30 図書館委員会
- 2.18 古典籍研修会
- 3.4 電子図書館サービス説明会（於大阪）
～5
- 3.4 古典籍研修会
- 3.13 図書館協議会
- 3.17 Ariel説明会
- 3.18 古典籍研修会
- 3.26 図書館委員会
〃 熊本県大学図書館協議会講演会
- 4.15 24時間開館システム・オープンセレモニー（薬学部分館）
〃 古典籍研修会
- 4.21 附属図書館係長会議
- 4.22 熊本県大学図書館協議会（熊本学園大学）
- 4.23 第27回九州地区国立大学図書館協議会（於鹿児島）
- 4.24 第48回九州地区大学図書館協議会（於鹿児島）

編集後記：大学構内のあちこちにも紫陽花が咲き出しました。紫陽花には雨がよく似合うとか、梅雨入りも間もなくでしょう。

さて、好評のシリーズものが、今号から新しくなります。今回は、附属図書館が架蔵している特殊文庫のうち特に古文書についての解説を、松本寿三郎文学部教授にお願いしました。第1回目は永青文庫蔵細川家文書についてです。

日常、古文書には縁のない方が多いと思いますが、これを機会に少し関心をもってもらえれば幸いです。

これからの図書館

図書館では平成9年度に次のような計画を立てています。

〔中央館〕

1. 増築・改築
2. 研究図書館機能の強化
 - (1) 外国雑誌の共同利用
 - (2) 資料の集中化と共同利用の促進
3. 電子情報サービスの整備
 - (1) CD-ROMデータベース提供サービスの拡充
 - (2) 電子ジャーナルの提供
 - (3) 独自データベースの構築
 - (4) 遡及入力
 - (5) 教養部蔵書点検
 - (6) 新KURESの開発
 - (7) 中国語・韓国語資料
4. 資料保存対策の策定
 - (1) 貴重図書の保存対策
 - (2) 酸性紙の保存対策
 - (3) 旧書庫資料の保存
5. 利用者サービスの拡充
 - (1) 閲覧環境の整備
 - (2) 研究者閲覧室の設置
 - (3) 利用者サービス拡大
 - (4) 情報教育支援の拡充
 - (5) OPAC利用説明会の実施
6. 保存図書館機能の整備
 - (1) 電動集密書架の設置
 - (2) 重複資料等の処分
7. 管理運営の改善等
 - (1) 図書館関連諸規定の改善
 - (2) 業務電算化の推進
 - (3) Arielの試行
 - (4) 業務の外部委託推進

〔医学部分館〕

1. 利用者サービスの充実
2. 相互利用サービス業務の改善
3. 本荘・九品寺地区再開発計画に伴う建築構想
4. 一般教養図書の充実
5. 24時間開館に伴う利用者の拡大

〔薬学部分館〕

1. 資料の収蔵能力増強
2. CD-ROMデータベースの提供拡大
3. 視聴覚機器の整備
4. 閲覧環境の整備
5. ダムウェーターの設置
6. 利用者用端末の設置

熊本大学附属図書館報「東光原」（とうこうげん）*

第17号（Vol.6 No.2）平成9年6月発行

発行所 熊本大学附属図書館

〒860 熊本市黒髪 2-40-1

TEL 096(342)2273 FAX 096(345)9087

HP <http://www.lib.kumamoto-u.ac.jp>

編集 山根文夫・飯田典子・成田和則

中尾康朗・伊波ひとみ・野元剛二

※ 現在の中央館の敷地一帯が、旧制第五高等学校時代東光原と称する運動場であったことに由来する。